

『京都マラソン2026』にて根付の紹介をさせていただきました。

国内外のランナーが参加する一大イベント『京都マラソン』では京都観光の魅力を発信する場としても京都市が積極的に取り組んでいます。当館でも現代根付の鑑賞ブースを設置し360名を超える方々にご覧いただきました。それをきっかけに当館にもご来館された方もいらして、新しい観光名所として知っていただく機会となりました。



次世代モビリティを活用した『移動根付館』が京都植物園にお目見え。

トヨタの次世代モビリティe-Paletteによる北山地域活性化を図る実証実験が3月9日(日)に行われ、当館では京都ノートルダム女子大学女性キャリアデザイン学環の皆さんとの連携イベントに協力しました。当館所蔵の現代根付やパネルの展示、また学生の皆さんが発案したゆるキャラを3D根付にして絵付けするなど伝統文化を体験いただきました。



- [目次]
- 企画展の見所
- 根付館便り
- 根付の素材百科

[発行元]

公益財団法人 京都 清宗根付館
〒604-8811 京都市中京区壬生
賀陽御所町46番地(壬生寺東側)
電話 075(802)7000
www.netsukekan.jp/



日本で唯一の現代根付専門美術館 京都 清宗根付館『企画展』のご案内

現代根付が知的好奇心をくすぐる『根付百科事典』展

根付はおよそ人が考えられる発想を活かして多種多様な題材を作品にすることから、掌(たなごころ)の森羅万象とたとえられます。そこには人類の知識が集約されたあらゆる分野を横断し、人類が考え得るすべての事物が網羅されています。それはさながら根付の百科事典といっても過言ではありません。百科事典とは英語エンサイクロペディア encyclopaedia で、ギリシア語のegkúklios paideia を語源としたものとされます。これはegkúklios (円環をなす、円満な)とpaideia (教育)の合成されたもので、全円的に集めた知識の教育を意味しています。そこには未知の世界

への飽くことのない好奇心の蓄積を見ることが出来ます。今回は百科事典のような根付の多彩さを体系的にまとめて紹介させていただきます。4月ば「自然：季節を彩る風物詩」として美しい山川草木と季節感を感じさせる風習の根付を紹介いたします。5月は「生物：輝きの生命賛歌」を特集し、人間の豊かや営みや世界の珍しい動物たちや小さき命をつなぐ虫たちの世界に迫ります。6月は「科学：進化と英知の物語」と題し、日進月歩の進化を遂げてきた人類の偉業や文化の発展など時代を超えた人類の進歩を根付でたどります。

根付の素材百科 根付に使用されるさまざまな素材を紹介します。

- 象牙(ぞうげ) 象牙は適度な硬さ(硬度2.5)と密度を持ち、肌理の美しい高級素材として古くから重用されました。日本最古の現存例は正倉院宝物の「紅牙撥鏝尺(こうげばちるじゃく)」があります。根付には江戸時代初期の発生時から使用されてきました。明治には殖産興業の勢いに乗り牙彫置物が一世を風靡し、昭和には印鑑ブームも起きました。現在、国外との輸出入は禁止ですが、日本国内では合法的に流通が認められています。
- 黄楊(つげ) 緻密で強度があり、細かい彫刻が可能のため最良の材料とされ、根付では多く使われます。他には櫛、将棋の駒、印鑑などでも利用されています。国内では山形・宮城以南の本州と四国、九州に分布しています。朝熊(伊勢)、御蔵島、薩摩などが名産とされます。最近では代用として輸入材のシャムツゲがありますがアカネ科なので、日本の黄楊とは別の種類です。
- 龍甲(べっこう) 熱帯のサンゴ礁地帯に生息するウミガメの「タイマイ」の甲羅です。自然が生み出した模様や半透明の色合いが美しく、日本人の黒髪にもよく似合うので簪(かんざし)や櫛などに使われました。徳川家康も龍甲製の手持ち眼鏡を使用していました。根付では動物などの目の象嵌に使用し、少量を大切に使用しています。
- 鹿角(かづ) 雄鹿特有の角で毎年生え変わります。乾燥にも強く耐久性があり、染色にも向くので根付でよく使われます。
- 漆(うるし) 縄文から続く漆は技法も多く、蒔絵(まきえ)、螺鈿(らでん)、数種の素材を象嵌する芝山、漆を塗り重ねた堆朱(ついしゅ)など多彩です。
- 猪牙(ちよき・いのき) イノシシの下あごの犬歯で弓なりの形状です。硬質なエナメルで覆われ、彫刻は難しいのですが、美しい艶がです。
- 黒檀(こくたん) 比重が高いため水に沈むものもあります。東南アジアやアフリカなど産地で種類が異なり、堅く黒いものほど貴重です。
- マホガニー 中南米原産で、その美しい茶褐色と硬質な耐久性から高級家具にも使用されます。木肌を活かして、素彫りのあと染色せずに仕上げます。
- 琥珀(こはく) 太古の樹液などが硬化した天然樹脂の化石で、宝飾品になります。大ぶりのものは根付に、小さいものは目の象嵌に使われます。
- マンモス牙 アラスカ、シベリアなどの凍土から掘り出されますが、個体差が激しいため厳選された材料が象牙の代替品として使用されます。
- 珊瑚(さんご) 水深100m以上の深海で育つ宝石珊瑚です。濃い赤から桃色、白色、乳白色まであります。歌舞伎の助六は赤珊瑚の根付を着用しています。
- ウニコール 一角(イッカク)鯨の左歯が長く伸びた牙で、漢方薬として江戸時代には金よりも価値があったとされた貴重品です。
- 樹脂(じゆし) エポキシ樹脂などの合成樹脂は現代ならではの素材です。また木材に樹脂を浸透させ硬化させたスタビライズドウッドもあります。
- 陶芸(とうげい) 陶土や磁土をこねて形を作ることができ、着色も自由にできるので表現の幅が広い特徴があります。
- ガラス 現代ならではの素材のひとつで、ガラスの透明感を活かし、かつカラフルな色合いや不定形なカタチが魅力的です。
- 木の実/クルミ・タグアナッツ クルミの堅い殻に浮彫りをして用います。タグアナッツは象牙椰子(ぞうげやし)とも言われ、象牙の代替品として使用されます。
- 金属(きんぞく) 金や銀・銅・アルミが使用されます。また日本独特の赤銅(しゃくどう)や、四分一(しぶいち)などの色金(いろがね)などをアクセントにします。

2026年 7月~9月の特別企画展のご案内

時をかける、摩訶不思議な根付の世界 『根付はタイムトラベラー』展

- 7月「時間を旅する根付」展 ■7月1日(水)~31日(金)
- 8月「異空間への憧れ」展 ■8月1日(土)~30日(日)
- 9月「極上の非日常」展 ■9月1日(火)~30日(水)

京都 清宗根付館 公式YouTube チャンネルを開設しました。今までの公式Twitter, Instagram でも、最新情報や作品画像を発信していますので、皆様のフォローをお待ちしています。



公式サイト

佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館および清宗記念館を支援しています。

京都 清宗根付館とは

当館は、佐川印刷株式会社取締役名誉会長 木下宗昭による「日本のよき伝統を、日本人の手によって、日本に保管したい」という発意によって、ここ文化首都・京都に設立された、日本で唯一の根付を専門とする美術館です。当館では、「新たな挑戦」と「絆」をむね(宗)とし、根付と根付をめぐる文化の継承・創造・発展を目指し、<魅せる><育む><繋がる>を使命に、地域と皆さまに開かれた美術館として活動しています。



Netsuke ignites intellectual curiosity "Encyclopedia of Netsuke" Special Exhibition in April "Nature: Scenes of the Season" • Special Exhibition in May "Biology: Ode to Life" • Special Exhibition in June "Science: Evolution and Wisdom"

現代根付が 知的好奇心をくすぐる 『根付百科事典』展

2026年 4月1日(水) ~ 6月30日(火)

4月「自然」季節を彩る風物詩展
5月「生物」輝きの生命賛歌展
6月「科学」進化と英知の物語展

京都 清宗根付館 KYOTO SEISHU NETSUKU ART MUSEUM

〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町46番地1(壬生寺東側) TEL. 075(802)7000

SAGAWA PRINTING

佐川印刷株式会社印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館と清宗記念館を支援しています。

4月 ■ 4月1日(水)～30日(木)

「自然:季節を彩る風物詩」展

春の盛りに咲く桜は植物でありながら、季節の到来を告げ、日本人の情緒と深く結びつける文化的な側面を持ちます。さまざまな花を美しく感じるのには私たち人間の解釈によるものですが、同時に普遍的な共通感覚も持ち合わせています。花は季節を象徴するものとして古くから愛でられ、年中行事の多くに花の名前が冠されました。節句では桃、花しょうぶ、菊などが当てられ、朝顔市やほおずき市などは各地の風物詩となっています。本企画展では根付を通して百科事典のようにさまざまな植物や花を紹介します。さらには花や植物の生命力にあやかった風習などの文化的な広がりも探っていきます。

5月 ■ 5月1日(金)～31日(日)

「生物:輝きの生命賛歌」展

百科事典を開くたびに新しい知識に触れることができ、好奇心に駆られて未知のページをめくるワクワク感を誰もが感じたことでしょう。地球上には約870万種の生物が生息すると推定されますが、まだ約86%が未発見(未知)とされています。私たち人間も含めて多くの生物は自らの生命を輝かせ、互いに関係を持っていて、地球全体が有機的でダイナミックな生命体といえます。本企画展では生命賛歌をテーマにして人間や生き物たちの躍動的なワンダーランドをお届けします。世界中の動物たちや、小さな昆虫たち、未知の魚たちなどが擬人化されたユーモラスなドラマとともに一堂に集合します。

6月 ■ 6月2日(火)～30日(火)

「科学:進化と英知の物語」展

自然界の不可思議な事象に対し観察や実験、検証をすることで世界の仕組みを解明しようとする知的な営みが科学とされます。それは人類が誕生してから常に進化し続ける知識の体系でもあります。人類の英知は科学によって獲得され、近年ではAIによる発展も注目されています。根付では科学で実証された明快な世界と、そこから少し外れた未知や未見の「なにか」とのズレに焦点を当て、その差異から生まれる違和感を作品にすることがあります。ただ科学を信奉するだけでなく、解明できない謎や社会の矛盾などをあぶり出すことで新しい視点に気づかせてくれるのが根付の魅力でもあります。



阿部 賢次 (1947~)
「大豊作」 高3.9cm
象牙

大黒天の商売繁盛、金運上昇にあやかって、米俵に大黒天の使いである鼠を配した「依ねずみ」の図柄は、五穀豊穡と子孫繁栄の願いが込められています。



桑原 仁 (1956~)
「おくどさん」 高3.2cm
鯨骨・象牙

京町家の通り庭には台所が置かれ、かまどに敬意をこめてこう呼びました。日々の食事を支えるだけでなく一家の中心的存在として神聖な場所とされました。



栗田 元正 (1976~)
「鶏頭」 高3.8cm
鹿角

鶏冠(とさか)にそっくりな花として奈良時代に大陸から渡来しました。作品ではアゲハ蝶も添えて、全体のシルエットで鶏の頭のように見せています。



井尻 朱紅 (1954~)
「ホタル」 高4.5cm
黄楊・漆

清水にしか生息しない蛍は近年環境の変化に伴い珍しくなりました。清少納言は『枕草子』で夕方から水辺を舞う静かで幻想的な光を称賛しました。



黒岩 明 (1949~)
「お茶女」 高4.1cm
象牙・漆・金・銀

八十八夜(5月上旬)で知られる茶摘みは女性の仕事とされ、茶摘女(ちゃつみめ)は晩春の季語です。無邪気で愛らしい「お茶目」と掛けています。



佐々木 明美 (1960~)
「止まない嵐はない」 高5.1cm
鹿角

暴風、豪雨、落雷などの自然の猛威に打ちのめされても、人々は耐えて乗り越えていくという、逆境に立ち向かう勇気を表しています。



佐田 澄 (1944~)
「立夏」 高3.2cm
象牙

立夏は夏の始まりを表し、暦上では5月上旬を指します。作品は大きくのけ反った女性が初々しさと開放的な印象を与え、雄大な山並みをも思わせませす。



スーザン レイト (1968~)
「えんどう豆の上に寝たお姫様」 高4.5cm 黄楊・漆

アンデルセンの童話より。本物を見極めるには表面の見た目ではなく、内面的な気づきや細部の違和感が大切だと教えています。



伊藤 忠綱 (1966~)
「大漁」 高2.3cm
象牙

大きな魚を追う漁師の姿には自然界の生命のつながりや連環を思い起こさせ、必死に生きようとする生命の輝きを見ることができます。



及川 空観 (1968~)
「飛躍」 高6.3cm
象牙

人生を一步踏み出す姿を作品にしています。三人の幼児はそれぞれ勇気(勝利の月桂冠)、決断(ラッパ)、不屈(成功の鍵)の三人が導いています。



宍戸 壽雲 (1960~)
「かぐや」 高2.0cm
象牙・鹿角

平安時代に成立した日本最古の物語『竹取物語』。月探査衛星「かぐや」から撮った地球とかぐや姫。最先端の技術と昔話をひとつの根付にしています。



喜山 利歩 (1972~)
「望郷」 高2.8cm
黄楊・鹿角・水牛

織田信長は当時の最先端技術や科学的合理性を積極的に導入した武将です。海外の文化や技術に興味を持ち、広い世界に目を向けていたとされます。



北澤 泉水 (1968~)
「フェアブルと夏休み」 高2.5cm
陶

『昆虫記』で知られるフランスの博物学者ファーブルは幼少期に祖父母に預けられ、自然豊かな環境で育ったことが、後の研究に影響を与えたといわれます。



伊藤 滋女 (1963~)
「グーテンベルグの印刷機」 高2.8cm 黄楊・漆

ドイツの金細工師グーテンベルグは1445年頃鉛合金を用いた活版印刷により印刷革命をもたらしました。活版「聖書」が史上初のベストセラーに。



小野里 三味 (1967~)
「神奈川沖浪裏」 高4.3cm
黄楊・漆

北斎の透徹した観察眼から生まれた傑作。大波が砕け散る直前、波頭が渦巻く形状は現代科学で流体力学に合っていると証明された「逼真の大波」です。